様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2022
課題番号：２１Ｋ１９９７０

研究課題名（和文）《薬師経》に見るインド浄土教の展開

研究課題名（英文）The Development of Pure Land Buddhism in India: A Study of the Bhaisajyaguru-Sutra

研究代表者
吹田　隆徳（Fukita, Takanori）

佛教大学・総合研究所・特別研究員

研究者番号：７０９１０７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：聞名思想を手がかりに『薬師経』の発達史を明らかにした。すなわち、この経典が発達する初期の段階では、薬師仏の功徳を説く部分に聞名思想が付加され、その後に願文へと付加されていったというものである。さらに、後代の編纂者たちが、本来は「経を聞く」とあった部分を「仏名を聞く」と改めることによって聞名思想を付加したということ、そして、それが5世紀から7世紀のあいだに起こった思想的変化であるということを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　大乗経典は時代の経過と共に増広されるのが常である。経典は各々が個別の発達を遂げているため、増広の仕方に一貫性を求めることはできないが、本研究では、『薬師経』にかんして、どのような方法で思想が付加されたのか、さらに、それが何世紀頃のことかということを具体的に明らかにした。これにより、大乗経典の中でも、特に浄土経典の発達にかんする一つのモデルケースを他の研究者に提供することができた。また、浄土経典を対象とした研究会を定期的に開催し、その中で若手と老練の研究者の交流をはかり、我が国における浄土経典研究のレベルアップに努めた。

研究成果の概要（英文）：As a result of a comparative study of the variants in all known versions of the Vaisajyaguru-sutra, I did my best to clarify the history of the development of this Mahayana Buddhist scripture.
　In this context, the notion of “hearing the name” of a buddha is central. This doctrine, which has an essential role in Pure Land Buddhism, was apparently added to the part of the sutra that explains the merits of the Vaisajyaguru Buddha, located between the descriptions of his twelve vows and the prolonging of a lifetime, in the first stage of development of the sutra itself. After that, it was added to the section proclaiming the twelve vows of this buddha.
　I also concluded that the author(s) of a later version of the Vaisajyaguru-sutra changed the original sentence "hearing the sutra" to "hearing the Buddha's name" in order to add the doctrine valuing “hearing the name”, and this change happened between the fifth and seventh centuries.

研究分野：大乗仏教

キーワード：薬師　聞名思想　浄土思想　浄土経典

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

『薬師経』（*Bhaiṣajyaguru-sūtra*）はサンスクリット原典とチベット語訳に加え、四つの漢訳が現存する。主な研究として、Gregory Schopenの研究（*The Bhaiṣajyaguru-sūtra and the Buddhism of Gilgit*, PhD. Thesis in Australian University）を挙げることができる。この研究は、サンスクリット原典を主な資料としながら、チベット語訳を参照し、両者の批判的校訂テキストと、原典からの英訳を提供する。その英訳には膨大にして詳細な注釈が施されており、先行研究の中で最も行き渡った調査が行われていると言える。ただ、この研究は、そのタイトルにも示されるように、『薬師経』原典（ギルギット写本）の分析に基づいて、ギルギットにおける仏教の実態解明を試みたものであり、特に四つの漢訳にかんしてはまったく参照されていない。

漢訳を参照する利点は、経録に記載される情報から、ある程度の正確な年代を想定しながら研究を進めることができる点にある。そして、漢訳が複数現存することにより、思想的変遷をそれぞれの訳出年代の幅で捉えることができる。『薬師経』の場合、現存する四つのうち、最も古い漢訳は457年に訳出された『抜除過罪生死得度経』（大正 No. 1331 第12巻）であり、この他に『本願経』（大正 No. 449, 615年）『本願功徳経』（大正 No. 450, 650年）『七仏経』（大正 No. 451, 707年）がある。サンスクリット原典（6–7世紀）やチベット語訳（9世紀）と比べれば、最も古い漢訳とのあいだには最大で300年以上もの差があることになる。

『抜除過罪生死得度経』は、古くから疑偽経として扱われた経緯があり、現存最古の『薬師経』でありながら研究者の注目を得られないでいた。そのような中、いち早く最古の『薬師経』として注目したのは1915年の松本文三郎の研究（「薬師経に就いて」『芸文』12:1291–1310）であった。しかし、この時代に、原典などとの比較によって、疑偽経の疑いを払拭するような研究は行われず、1969年の新井慧一(誉)の研究（「薬師経―一仏経と七仏経（続）―」『印仏研』17(2): 213–218）に至って、ようやく、その資料的価値に研究者の注意が向けられるようになる。これ以降、長尾佳代子などの研究者が、『抜除過罪生死得度経』を他の資料と等しく扱うことにより『薬師経』の発達史にかんする成果をあげている（「ギルギット本『薬師経』の成立―仏教大衆化の一齣―」『パーリ学仏教文化学』7: 101–110 etc.）。

このように『薬師経』研究における漢訳の存在意義は大きい。ただ、漢訳を参照した研究は部分的な考察にとどまり、『薬師経』全体に行き渡るSchopenの研究は漢訳を参照していない。『薬師経』研究の次なる段階としては、最も古い『抜除過罪生死得度経』を主な資料としながら、サンスクリット原典など、それ以外の資料を補助的に用いて、Schopenの研究を更新するような研究が望まれる。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の三つである。

(1)『薬師経』諸本のうちで最も古い『抜除過罪生死得度経』を主な分析対象として、他の資料との対照を行い、『薬師経』が本来どのような思想を説いていたのかを明らかにする。

(2)『薬師経』の発達史を明らかにするとともに、この経典がどのような思想的変遷を経ているのかを明らかにする。

(3)『薬師経』を起点として、浄土思想の起源を『無量寿経』（*Sukhāvatīvyūha*）『阿閦仏国経』（**Akṣobhyatathāgatasya vyūha*）へと遡る研究の基盤を構築する。具体的には各経典の比較研究に資する浄土思想の抽出を行う。

３．研究の方法

『抜除過罪生死得度経』を中心とした研究資料を作成する。現代語訳を行った上で、異本とのあいだに見られる異同を明記し、他との対応が見られない箇所にはアンダーラインを施すなど、『抜除過罪生死得度経』のもつ特殊性を研究者が一見して理解できるような形で公開する。

作成した研究資料の分析に基づき、主に欠落している思想が何かを明確にする。例えば、資料A（5 世紀）に説かれていながら、資料 B（4 世紀）には欠落することが明らかになる場合、ここ

に思想的展開の可能性が見出せるのであり、尚且つ、それが 4–5 世紀のあいだに起こったという具体的な年代の幅で跡づけることが可能となる。

薬師仏との比較研究を予定している阿弥陀仏にかんする資料の作成が必要である。この仏が登場する経典の中から『悲華経』を取り上げる。研究会をオンラインにて定期的に開催し、国内にいる若手から老練の研究者まで幅広い交流をはかる。

４．研究成果

研究資料を作成する一環として『抜除過罪生死得度経』の現代語訳を作成し公開した。その脚注には異本とのあいだに見られる異同を記してある。この訳注研究では現存最古の『薬師経』がどのような様相を呈していたのか、他の研究者にも理解しやすいようになっている。古い様相を復元すると同時に、『梵網経』や敦煌で発見されている『善信二十四戒経』との関連を指摘しており、この経典に部分的に見られる中国的改変の跡についても研究者の注意が向きやすいようになっている。その成果は『佛教大学仏教学部論集』第 107 号（85–111 頁）に掲載している。

『薬師経』における聞名思想にかんする調査を行い、薬師経の発達史を明らかにした。薬師仏の十二誓願を例に言うと、聞名思想は、願文において、まったく説かれない（=A 群, 5 世紀）、計 3 つの願に説かれる（=B 群, 7 世紀）、計 7 つの願に説かれる（=C 群, 8 世紀）という異同のある思想となっている。このことから、薬師経における聞名思想は、後代に付加されたものである可能性があり、願文に見られる異同が経典の発達史を反映するとして、新井慧一(誉)（薬師経―一仏経と七仏経（続）―」『印仏研』17(2): 213–218）によって早くから注目されていた。

そこで、願文に続いて語られる功徳文に注目すると、この範囲では、上述の B 群 C 群という区別が見られなくなることがわかった。この区別の消失は、功徳文への聞名思想の付加が B 群の資料の時点（=7 世紀）で完了していたことを示すのであり、一方、願文は C 群の資料の時点（=8 世紀）に至って、最終的な計 7 願への付加が完了したということになる。このような分析結果に基づいて、薬師経における聞名思想の付加は、初期段階では功徳文を中心に行われ、その後に願文へと移行していったという、より具体的な発達史を明らかにした。

さらに、聞名思想を付加した背景に考えられる思想的変遷についての一見解を提示した。功徳文において、BC 群の資料に「仏の名を聞く」とある箇所は、A 群の資料では「経を聞く」となっていることが諸本対照によって知られるのであり、聞く内容が「経」から「仏名」へと変化していることがわかる。このことから、薬師経の発達過程において、経巻信仰から仏名信仰への思想的変遷があったと推定した。そして、その変遷が起こった具体的な年代として、漢訳諸本の訳出年代を手掛かりに、5 世紀から 7 世紀のあいだを想定した。この成果について、印度学仏教学会第 73 回学術大会において「薬師経に見る聞名思想の加上」というタイトルで研究発表を行い、『印度學佛教學研究』第 71 巻 1 号（97–102 頁）に掲載している。

『悲華経』サンスクリット原典からの訳注研究を、五島清隆、吹田隆道、壬生泰紀らと共同作業のもと公開した。今回公開したのは第 4 章のアラネーミン王の誓願から授記が説かれる範囲であり、先行訳としては岩本裕の抄訳（『大乗経典 4』（仏教聖典選 第 6 巻）, 読売新聞社 1974, 203–340 頁）が存在しているが、我々が公開した訳注研究では、原典の批判的校訂が行われ、より原典に忠実な訳となっており、願数などにおいて先行訳とは異なる理解が示されている。

この経典では、アラネーミン王こそが後に阿弥陀仏となる人物であり、その誓願は阿弥陀仏の本願に他ならない。その本願については既に多くの研究成果が残されているが、聞名思想の観点からこれを見直し、上述した薬師経の発達史と関連させて考えることにより、新たな視点からの研究成果が期待される。今回公開した『悲華経』の訳注研究はその研究資料のひとつとなる。この成果は『佛教大学仏教学会紀要』第 28 号（105–128 頁）に掲載している。（継続予定）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 吹田隆徳	４．巻 71(1)
２．論文標題 薬師経に見る聞名思想の加上	５．発行年 2022年
３．雑誌名 印度學佛教學研究	６．最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吹田隆徳	４．巻 107
２．論文標題 抜除過罪生死得度経：和訳と訳注	５．発行年 2023年
３．雑誌名 佛教大学仏教学部論集	６．最初と最後の頁 85-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 五島清隆、吹田隆道、吹田隆徳、壬生泰紀	４．巻 28
２．論文標題 梵文悲華経 第4章：和訳と訳注(1)	５．発行年 2023年
３．雑誌名 佛教大学仏教学会紀要	６．最初と最後の頁 105-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 吹田隆徳
２．発表標題 薬師経に見る聞名思想の加上
３．学会等名 日本印度學佛教學会第73回学術大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関